

Title	メタフシカ 第31号 彙報/編集後記/奥付
Author(s)	
Citation	メタフシカ. 31 p.167-p.168
Issue Date	2000-12-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/66642
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【彙報】

●現代思想文化学

専門分野「現代思想文化学」は、本学大学院文学研究科哲学講座に創設されて三年目を迎えた。当分野における研究活動は、近現代の哲学に関する哲学史的な研究を基礎としつつ、現代における哲学的・思想的な諸問題はもちろん、社会的・文化的な諸問題に対して、学術的・哲学的な仕方を取り組んでいこうとするものである。このような取り組みは、デカルト以来のフランス哲学やドイツ観念論のほか、生の哲学、実存哲学、あるいは現象学、解釈学などを研究領域とした哲学的研究を進めつつ、生命や環境、科学、技術、あるいは宗教といった問題領域をも射程に入れている。

現在当分野には、博士後期課程に七名、博士前期課程に七名の大学院生が所属しており、また、そのうち二名が外国人である点で、その構成は国際的でもある。なお、研究・指導にあたる教官は、浅野遼二教授と溝口宏平教授、望月太郎助教授、そして佐々木正寿助手である。

当分野において現在行われている研究・教育活動は概ね、ヘーゲルの思想やキェルケゴールの実存哲学、生命倫理に関するもの（浅野教授）、ハイデガーの思想や解釈学的哲学、環境思想に関するもの（溝口教授）、十八・十九世紀のフランス思想史やライプニッツの認識論、風土論に関するもの（望月助教授）、そして、ハイデガーの思想や現代解釈学、感情論・気分論に関するもの（佐々木助手）である。

また、本年度より当分野は、望月太郎助教授を中心にして「現代思想文化学研究会」を発足させ、随時研究討論会を催している。この研究会は、哲学の哲学史的研究にとどまらない、「現代思想文化学」としての自立した学術的研究のあり方・方法論を探りつつ、来るべき時代に生き延びてゆく学術的な知の営みを遂行してゆこうとするものである。

●哲学哲学史

専門分野「哲学哲学史」は、哲学と哲学史とは不可分であるとの考えから、開設以来、両研究を一体化してきた。元来はフランスおよびドイツを中心とした二つの講座（哲学哲学史第一講座、第二講座）に分かれて、ヨーロッパ近世から現代にいたる哲学を文献学的、歴史的に研究していたのが、近年の改組にしたがって一つの講座となり、それがさらに本分野と現代思想文化学との二分野に分けられ、現在新たな組織となつて存続している。本分野では、そのような伝統を踏まえつつ、英米系の

分析哲学やプラグマティズム、日本の哲学をレパートリーに加えて、今日のなテーマにも取り組み、専門分野・文化基礎学や現代思想文化学との緊密な連携体制のもとで教育・研究を行っている。本年度は、博士課程前期課程に十二名、同後期課程に六名が在籍しており、里見軍之、山形頼洋、入江幸男、吉永和加の各教官が、教育・研究指導にあたっている。

研究室における研究・教育活動は、十八世紀以降の哲学史、現象学、解釈学、自然哲学（里見教授）、スピノザ・ライプニッツ哲学、ベルクソン哲学、現象学、西田哲学の研究（山形教授）、ドイツ観念論、問答論理学、コミュニケーション論（入江助教授）、アンリ哲学、生の哲学の研究、共同体論（吉永助手）などを中心とし、さらに本年度は非常勤の先生方にホップズ哲学、中世哲学、宗教哲学、科学史・科学論等を講じて頂いた。また、専門分野・文化基礎学が主催する共同研究会（「自然のなかの人間」）や、現代思想文化学や臨床哲学と共同で行われている科学研究費補助金基盤研究（「コミュニケーションの存在論」）に、教官・院生とも積極的に参加し、活動している。

●臨床哲学

専門分野「臨床哲学」は、一九九八年度より文学部「倫理学専修」と分かれて大学院文学研究科に設立された。当分野は同時代のさまざまな社会問題が発生しているその現場に臨み、そこから問題の析出やその表現をその現場のひとびととともに試みると同時に、これまでの哲学・倫理学の研究のあり方について、その教育・方法・評価・発表などの側面から検討を行っている。具体的には、看護・介護・教育関係などの社会人入学者を積極的に迎えるほか、学内外で研究会を開き、多方面からの参加者とともに議論を続けている。本年度は、博士前期課程に十一名、同後期課程に九名在籍しており、鷺田清一、中岡成文、本間直樹の各教官のもとで個別研究を行うほか、学内外のさまざまな活動のプラン作りや実践に取り組んでいる。

このような臨床哲学の活動はいくつかの媒体を通じて公開されている。臨床哲学論考集『臨床哲学』第三号には、学校教育、失語症、環境、障害者問題、対話などさまざまな臨床現場に関する論文が研究室内外から寄せられている。同じく季刊『臨床哲学のメチエ』では、ホスピス、セクシュアリティ、ソクラテイク・ダイアログなどの特集が組まれ、臨床の知のネットワーク化が試みられている。また上記機関誌を含ま

め本専門分野の研究ならびに社会活動については、ホームページ
(<http://bun701et.osaka-u.ac.jp/index.htm>)でも読むことができる。

各教官とも臨床哲学のプロジェクトに全力をあげて取り組むほか、個人的には、鷺田教授は現在、現象学（フッサールとメルローポンティ）研究、所有論、身体論、他者論、ホスピタリティ論に、中岡教授はヘーゲル研究、日本近現代哲学思想史研究、コミュニケーション論、ケア論に、本間講師は社会・進化・コミュニケーション・対話・セクシュアリティなどに関する研究に取り組んでいる。

【編集後記】

「メタフユシカ」第三十一号をお届けいたします。本号から論文に欧文要旨を付けることしました。また書評を掲載することにしました。皆様の忌憚のないご意見、ご批判をお寄せいただければ有り難く存じます。

なお、前号「メタフユシカ」第三十号では、タイトル「METAPHYSICA」が誤って印刷されていました。ここに、訂正してお詫び申し上げます。

（入江幸男）

【編集委員会】

「メタフユシカ」第三十一号編集委員

委員長

溝口 宏平（現代思想文化学・教授）

入江 幸男（哲学・哲学史・助教授）

本間 直樹（臨床・哲学・講師）

補佐

佐々木正寿（現代思想文化学・助手）

メタフユシカ 第三十一号

平成十二年十二月二十日 印刷

平成十二年十二月二十五日 発行

編集兼
発行者

大阪大学大学院文学研究科哲学講座

〒550-8583 豊中市待兼山町一―五

印刷所

株式会社 田 中 プ リ ン ト

〒600-8077 京都市下京区松原通麩屋町東入